

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第181集

# 上反町遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 上反町遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日の課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成2年度と平成3年度にわたって発掘調査した上反町遺跡の調査結果をまとめたものであります。上反町遺跡は、和賀川右岸の夏油川によって形成された扇状地の末端部に立地し、調査の結果、縄文・弥生時代から中近世の遺構・遺物が発見されるなど、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成4年10月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

## 例 言

1. 本報告書は岩手県北上市和賀町煤孫6地割60-1ほかに所在する<sup>かみくらま</sup>上反町遺跡の発掘調査結果を取録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号および遺跡調査略号は次のとおりである。  
遺跡番号 ME64-2025・遺跡調査略号 KS90, KS91
4. 調査面積は4,710㎡である。野外調査は平成2年4月13日から6月26日、平成3年8月7日から10月29日の2度にわたって実施し、調査資料の整理作業は平成2年11月1日から3月31日、平成3年11月1日～3月31日まで実施した。
5. 発掘調査は平成2年が川村均、星雅之、平成3年が伊東格、新倉信一郎が担当し、室内整理および報告書の作成は伊東格が担当した。
6. 各種鑑定等に当たっては下記の方をお願いした。  
石材鑑定 佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）  
炭化材の樹種鑑定 早坂松次郎氏（岩手県木炭協会）
7. 野外調査に当たっては、北上市教育委員会および地元の方々の御協力をいただいた。
8. 本遺跡から出土した遺物および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

序  
例言

## 本 文

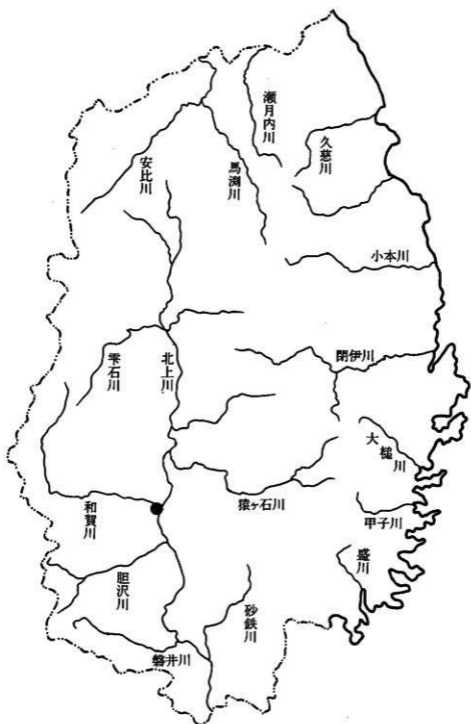
I. 調査にいたる経過	2	IV. 調査の結果	11
II. 立地と環境	4	1. 焼土遺構	11
1. 遺跡の位置と地形	4	2. 土坑	13
2. 遺跡および周辺の地形	5	3. 陥し穴状遺構	13
3. 基本層序	5	4. 堀跡	14
4. 周辺の遺跡	6	5. 集石遺構	21
III. 調査と室内整理の方法	7	6. 炭窯	22
1. 調査方法	7	7. 遺構外出土遺物	25
2. 室内整理方法	8	V. まとめ	35

## 図 版 目 次

第1図 岩手県全区	1	第13図 堀跡(5)	21
第2図 遺跡位置図	2	第14図 集石遺構	21
第3図 遺跡周辺の地形図	5	第15図 1・2号炭窯	23
第4図 基本層序	6	第16図 3号炭窯	24
第5図 遺構配置図	9・10	第17図 遺構外出土遺物(1)	27
第6図 1・2・3号焼土遺構	11	第18図 遺構外出土遺物(2)	28
第7図 4・5・6・7号焼土遺構	12	第19図 遺構外出土遺物(3)	29
第8図 1号土坑、1号陥し穴状遺構	13	第20図 遺構外出土遺物(4)	30
第9図 堀跡(1)	14	第21図 遺構外出土遺物(5)	31
第10図 堀跡(2)	15・16	第22図 遺構外出土遺物(6)	32
第11図 堀跡(3)	17・18	第23図 遺構外出土遺物(7)	33
第12図 堀跡(4)	19・20	第24図 遺構外出土遺物(8)	34

## 写真图版目次

写真图版 1 .....	39	写真图版 8 .....	46
写真图版 2 .....	40	写真图版 9 .....	47
写真图版 3 .....	41	写真图版10 .....	48
写真图版 4 .....	42	写真图版11 .....	49
写真图版 5 .....	43	写真图版12 .....	50
写真图版 6 .....	44	写真图版13 .....	51
写真图版 7 .....	45		



第1図 岩手県全図

## I 調査にいたる経過

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち、第9次・第10次施行命令区間は、北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9kmである。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行っており、昭和62年4月13日付け「仙建北工第35号」による依頼をうけて分布調査結果を同年5月25日付け「教文第117号」により日本道路公団仙台建設局に回答し、その取り扱いについて協議を重ねられ、止むを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

発掘調査の実施については、昭和63年度以降、岩手県教育委員会が発掘調査事業を日本道路公団に照会し、回答を受けたのち日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の3者の協議を経て、埋蔵文化財センターが担当することとした。事業着手後に調査の変更のある場合もその都度協議しながら進め、岩手県教育委員会文化課の調整を経て事業計画を変更して進めた。

本報告書の上反町遺跡の調査は平成2年3月2日付け「教文第731号」による平成2年度埋蔵文化財調査事業の通知を受け、平成2年4月1日付け委託契約により調査に着手したが、用地買収の遅れた部分の調査は次年度に繰り越すこととした。3年度の調査は3年2月7日付け「教文第899号」による事業の通知を受け、4月1日付け契約により着手したものである。



第2図 遺跡位置図



## 平成3年度までの年度別遺跡調査終了面積

※和賀町は平成3年4月から北上市と合併

遺 跡 名 (所在地)	調査対象 面積 (㎡)	元年度 調査面積 (㎡)	2年度 調査面積 (㎡)	3年度 調査面積 (㎡)	備考 (計画変更)
柳 上 (北上市)	4,930	90	1,440	3,400	3年度継続調査
上 鬼 柳 IV (北上市)	9,190		9,190		
上 鬼 柳 III (北上市)	8,370		8,370		
上 鬼 柳 II (北上市)	300		300		
上 鬼 柳 I (北上市)	8,700		7,400	1,300	3年度継続調査
岩 崎 台 地 (和賀町)	50,500	29,250	17,550	3,700	
岩 崎 城 西 (和賀町)	5,550	5,550			
梅ノ木台地 I (和賀町)	9,000	6,000	3,000		2年度継続調査
梅ノ木台地 II (和賀町)	3,890			3,890	
兵 庫 館 (和賀町)	3,130	980		2,150	
上 反 町 (和賀町)	4,710		3,090	1,620	3年度継続調査
観 音 館 (和賀町)	8,290		4,300		残りは4年度予定
煤 孫 (和賀町)	15,560		11,960	3,600	3年度継続調査
法 量 野 I (和賀町)	9,990			9,990	2年度相掘
中 屋 敷 (和賀町)	6,080			6,080	
林 崎 館 (和賀町)	14,150		14,150		
本 郷 (和賀町)	15,490	12,540	2,950		2年度継続調査
石 曾 根 (和賀町)	3,150	2,450	700		2年度継続調査
月 館 (和賀町)	3,590	3,590			
八 幡 館 (和賀町)	3,820	3,820			
八 幡 野 II (和賀町)	58,070	25,160	20,970	11,940	2・3年度面積変更
田 中 館 (和賀町)	5,980	2,570	3,410		2・3年度面積変更
大 渡 II (湯田町)				15,000	面積変更・4年度継続
越 中 畑 V (湯田町)				2,000	面積変更・4年度継続
	252,440	92,000	108,780	64,670	

## II 立地と環境

### 1. 遺跡の位置と地形

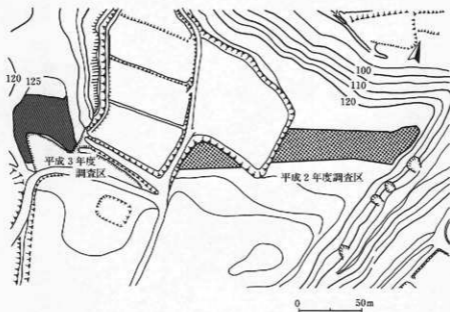
本遺跡の所在する北上市は、岩手県を南北に貫いて流れる北上川の中流域に位置し、北は花巻市及び沢内村、東が東和町及び江刺市、南は金ケ崎町及び胆沢町、西は湯田町とその境を接する。北上川は全長249km、流域面積10,150km<sup>2</sup>の東北第一の大河で、中流域の右岸においては新第三紀層の砂岩、凝灰岩を基盤とする台地、扇状地の末端に浸食崖を形成する。同川は北上市古川で奥羽山脈の和賀岳(1,440m)に源を発する和賀川と合流し、北上盆地を形成する。北上盆地は北上川と和賀川をはじめとするその支流が開析したものであり、北上川の支流である和賀川も、夏油川など一級河川13を支流とする全長75kmの一級河川である。北上川に注ぐ支流のうち、大きな河川の殆どは奥羽山脈に水源を持ち、東に向かって流れる。このため、奥羽山脈支流から運び込まれる砂礫量は北上山地支流に比べて著しく多く、北上川の西では大小の段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互に入り組む構造となっており、古来から人々に生活の場を提供してきた。本遺跡の立地する北上市煤産地区も和賀川南岸の扇状地および河岸段丘上に位置している。

和賀川下流域南岸の河岸段丘は大きく高位、中位、低位の3段丘に分けられる。高位段丘は『岩手県土地分類基本調査地形分類図』(1976、以下『地形分類図』)の丘陵地IIである。中川久夫他の分類によると西根段丘に相当するが、かなりの開析をうけているため、『地形分類図』では段丘とせず、丘陵地としている。中位段丘は『地形分類図』の砂礫段丘IIで、中川他の村崎野段丘に相当する。西根段丘に比して段丘面は平坦でよく保在されており、周囲をより新鮮な低位の金ケ崎段丘にとり囲まれている。村崎野段丘の構成層は礫層(飯登礫層)で、基質は砂であるが、上部で粘土質となり、その上位に黒沢尻火山灰が重なる。黒沢尻火山灰の主部はその下半の黄褐色浮石層(村崎野浮石)で、南西に位置する焼石岳(1,548m)に起源をもつものである。この浮石層の堆積時期は、ウルム氷期前半(4~7万年前)と考えられている。低位段丘は『地形分類図』の砂礫段丘IIIで、中川他の金ケ崎段丘に相当する。金ケ崎段丘は北上川中流沿岸でもっとも広範囲を占める段丘で、扇状地形をよく示している。和賀川上流では古期の段丘を蔽い、下流ではそれらを開析した河谷中にのびる。傾斜は中位段丘である村崎野段丘より急で、細分される場合には、新期のものほど急傾斜となる傾向がある。構成層は礫層(瘤木礫層)である。金ケ崎段丘は火山灰に蔽われていない。

### 2. 遺跡および周辺の地形

本遺跡が所在する北上市和賀町煤産は北上市のほぼ中央部にある。本遺跡は東日本旅客鉄道

北上線藤根駅の南西約2.7km、北緯39度16分、東経141度1分付近に位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は段丘上の平坦地で約123m～124mで、和賀川の沖積面との比高は39mである。調査区の南側を除いた三方は沖積地に向かって急峻な崖となっている。調査区の現況は山林である。



第3図 遺跡及び周辺の地形

### 3. 基本層序

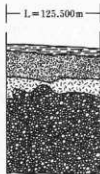
上反町遺跡の調査対象区域は、急峻な崖で東側、中央、西側の3つの調査区に分けられ、平成2年度、平成3年度と2年にわたって調査が実施されたため、遺跡の基本的な層序の確認は東側調査区と西側調査区の2カ所で実施している。

#### 東側調査区

- I層 暗褐色シルト 表土。植物根、腐葉土が入る。層厚5cm～10cm
- II層 暗褐色シルト 植物遺体の混入は少ない。層厚20cm～40cm
- III層 褐色シルト 上面が遺構の検出面。層厚10cm～20cm
- IV層 黄褐色粘土質シルト 下層には礫が混じる。

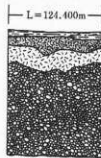
## 西側調査区

- I層 暗褐色シルト 表土。植物根、腐葉土が入る。層厚5cm~10cm  
 II層 暗褐色シルト 植物遺体の混入は少ない。層厚20cm~40cm  
 III層 褐色シルト 層厚10cm~20cm  
 IV層 黄褐色粘土質シルト 下層には礫が混じる。



西側調査区 基本層序

- I. 暗褐色シルト 表土で全体的に植物根の混入する。  
 II. 暗褐色シルト  
 III. 褐色シルト 遺物の積出面である。  
 IV. 黄褐色粘土質シルト 下層には礫が多数混入する。



東側調査区 基本層序

- I. 暗褐色シルト 表土  
 II. 暗褐色シルト  
 III. 褐色シルト  
 IV. 黄褐色粘土質シルト 下層には礫が混じる。

## 第4図 基本層序

### 4. 周辺の遺跡

発掘調査された遺跡に限定し、本遺跡を含めた和賀川周辺の遺跡について概観する。

和賀川北岸では、中位段丘やその縁辺部および開析された小支谷沿いに縄文時代の遺跡が比較的多く分布する。調査された主な遺跡としては、旧石器時代から近世にわたる複合遺跡で、縄文時代前期末と中期初めに属する超大型住居が検出された鳩岡崎遺跡、縄文時代晩期終末の遺跡で多数の亀ヶ岡式土器が出土している九年橋遺跡があげられる。低位段丘上や低位段丘に沿って河岸低地に形成された自然堤防上には、奈良時代から平安時代にかけての遺跡が多く分布する。調査された主な遺跡としては、多数の墨書をともなう土師器や須恵器、木製品を出土している下谷地遺跡、7世紀後半から8世紀初めにかけての円墳群で、長沼・八橋・五条丸・猫谷地の4支群からなる江釣子古墳群などがある。

和賀川南岸では、丘陵縁辺や中・低位段丘上に開析された支谷に沿って、縄文時代から平安時代までの遺跡が分布し、段丘の北側縁辺部には湧泉や深く入り込んだ沢や急崖を利用した城

館遺跡が分布している。調査された主な遺跡としては、段丘構成層から旧石器が出土している和賀仙人遺跡(旧石器の散布地)、低位段丘上に立地する下岩沢Ⅰ遺跡(集落跡・土坑、縄文土器、弥生土器)、梅ノ木遺跡(縄文・古代・中世の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器)、成沢遺跡(平安時代の竪穴住居跡、土師器)、中位段丘上に立地する下成沢遺跡(旧石器、縄文土器、土師器)、上大谷地遺跡(平安時代の竪穴住居跡、縄文土器、土師器)などがあげられる。

平成元年度には本遺跡も含めて東北横断自動車道秋田線建設関連の遺跡発掘事業が始まり、和賀川南岸の低位段丘の縁辺部に立地する柳上遺跡(縄文時代の竪穴住居跡)、上鬼柳Ⅰ遺跡(平安時代の竪穴住居跡)、上鬼柳Ⅱ遺跡(弥生時代の竪穴住居跡)、上鬼柳Ⅲ遺跡(平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、窯跡)、上鬼柳Ⅳ遺跡(縄文・弥生時代の土坑)、岩崎台地遺跡群(平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡)、岩崎城西遺跡(縄文・弥生時代の土坑)、梅ノ木台地Ⅰ・Ⅱ遺跡(散布地)、兵庫館跡(散布地、中世の堀跡)、上反町遺跡(本遺跡)、観音館跡(散布地)、煤孫遺跡(縄文時代の竪穴住居跡、土坑)、法量野Ⅰ遺跡(縄文・弥生時代の土坑)、本郷遺跡(縄文、平安時代の竪穴住居跡)、石曾根遺跡(縄文時代の竪穴住居跡、土坑)、月館跡(堀跡、櫓列状遺構、陥し穴状遺構、縄文土器)、八幡館跡(平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構)、八幡野Ⅱ遺跡(平安時代の竪穴住居跡、土坑)、田中館跡(縄文時代の土坑)などの遺跡が調査された。

### Ⅲ 調査と室内整理の方法

#### 1. 調査方法

##### (1) 地区割

上反町遺跡の調査区域割は、調査区が急峻な崖で東側、中央、西側の3つの調査区に分けられるため、遺跡の調査を統一的に把握できるよう、次のように行った。

遺跡内に任意の1点を設け、基点1とした。基点1から東に40m離れたところに1点をとり基点2とした。基点1と基点2を結ぶ直線を軸線とし、縦横方向に40m間隔の大グリッドを設定し、さらに大グリッド毎に4m間隔の小グリッドを設定した。大グリッドは軸線方向を西からA、B、～Q、軸線と直交する方向を北からⅠ、Ⅱ、～Ⅶと命名し、軸線方向の小グリッドをa～e、軸線と直交する方向のそれを1～5とした。大グリッド名は両者をあわせてⅡA、ⅢAのように呼称し、小グリッドはⅢB4h、ⅥB7dのように表した。検出した遺構数が少なかったため、遺構名は1号焼土遺構、1号土坑のように、大グリッド名を頭にせずに表示し、

小グリッドは遺構外の遺物の出土地点を表す場合に使用した。

なお、基点1、基点2の公共座標は次のとおりである。

	第X系	標高
基点1	X=-80,180.000m Y=16,640.000m	124.371m
基点2	X=-80,180.000m Y=16,700.000m	124.402m

## (2) 掘掘り・調査

調査区の現況は山林や藪であるため、雑木の撤去や焼却作業からはじめ、地区割りと併行して試掘トレンチを入れながら遺構検出を進めた。表土除去作業には人力と重機を併用した。

遺構には遺構名を付し、検出作業後、順次、精査をおこなった。出土遺物は、遺構名・地区名・層位などを記入して取り上げた。

## (3) 実測・写真撮影

実測は簡易測り方測量でおこなった。実測図は縮尺20分の1を基本としたが、焼土遺構は10分の1でおこなった。遺構のレベルは1m間隔を原則とし、必要に応じて計測箇所を設けている。写真は、6×7cm版1台（モノクロ）と35mm版2台（モノクロ、カラーリバーサル）の3台を1セットとして使用し、埋土断面・全景・遺物出土状況などを撮影した。

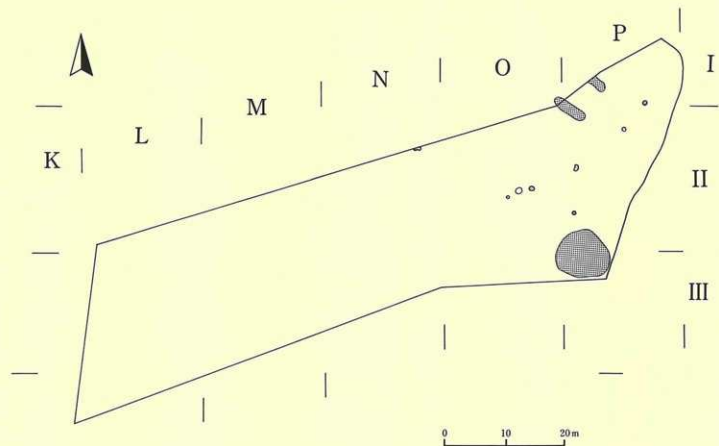
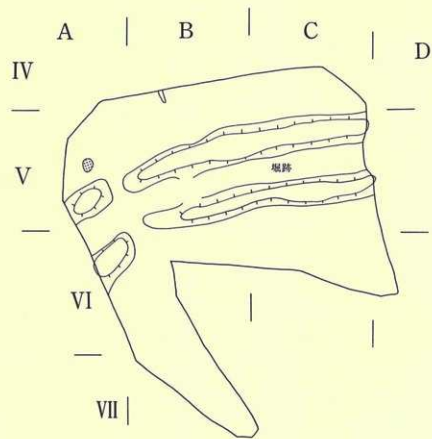
## 2. 室内整理方法

### (1) 作業手順

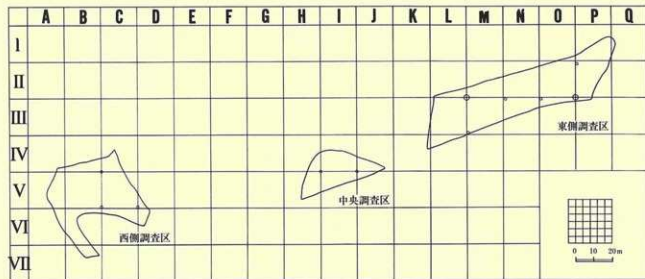
室内整理は、現場で残してきた遺物の注記からはじめ、次いで接合・復元・石膏入れの作業をおこなった。これらの作業を終わった段階で、遺物の仕分・登録をおこない、報告書掲載分について、写真撮影をおこなった。その後、遺物実測、土器拓本、遺物・遺構トレースの順に作業を進め、最後に図版や写真図版を作成した。以上の作業と併行して、計測、諸鑑定、原稿作成をおこない、報告書に掲載した。

### (2) 図版

遺構図版の縮尺は土坑、陥し穴状遺構、焼土遺構が30分の1、堀跡の断面が100分の1、その他を任意縮尺としている。遺物図版の縮尺は土器が3分の1、石器は原則として2分の1であるが、一部3分の1のものも含まれる。写真図版の縮尺は、遺構・遺物とも不定である。



● 焼土遺構    ○ 土坑・陥し穴    ● 炭室    ■ 集石遺構



第5図 遺構配置図

## IV 調査の結果

### 1. 焼土遺構

#### 1号焼土遺構 (第6図、写真図版3)

東側調査区の I P 4 d グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は72cm×50cm、層厚は最大で4cmである。出土遺物はない。

#### 2号焼土遺構 (第6図、写真図版3)

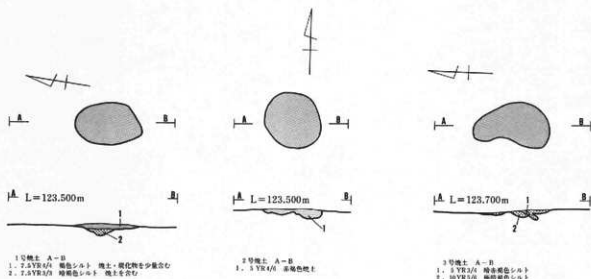
東側調査区の I P 5 c グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は径60cm、層厚は最大で11cmである。出土遺物はない。

#### 3号焼土遺構 (第6図、写真図版3)

東側調査区の II P 2 a グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、規模は80cm×34cm、層厚は最大で11cmである。出土遺物はない。

#### 4号焼土遺構 (第7図、写真図版3)

東側調査区の II O 3 d グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は径85cm、層厚は最大で10cmである。出土遺物はない。



第6図 1・2・3号焼土遺構



5号焼土遺構（第7図、写真図版4）

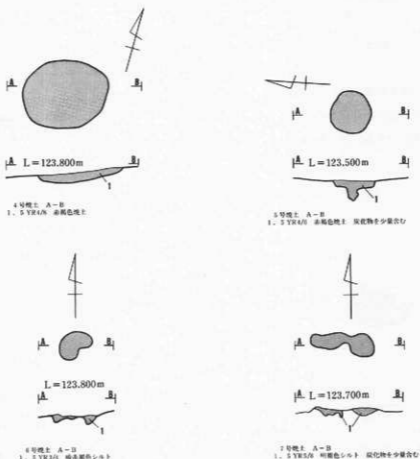
東側調査区II P 4 a グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は45cm、層厚は最大で20cmである。出土遺物はない。

6号焼土遺構（第7図、写真図版4）

東側調査区のII O 3 c グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、規模は40cm×35cm、層厚は最大で10cmである。出土遺物はない。

7号焼土遺構（第7図、写真図版4）

東側調査区のII N 1 d グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、規模は60cm×30cm、層厚は最大で8cmである。出土遺物はない。



第7図 4・5・6・7号焼土遺構

## 2. 土坑

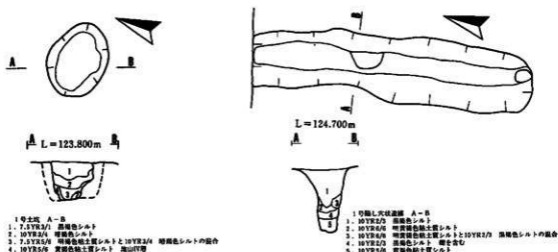
### 1号土坑 (第8図、写真図版4)

東側調査区のII O 3 d グリッドに位置する。平面形は開口部、底部とも楕円形、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径80cm×61cm、底部径62cm×44cm、深さは中心部で40cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。床面は凹凸が著しい。埋土は4層に分けられ、底部から北壁にかけて横褐色土が堆積する。全層にわたって炭化材が少量出土しているが、出土遺物はない。なお、断面図において破線で示した部分は精査の際に掘り足りなかった部分である。

## 3. 陥し穴状遺構

### 1号陥し穴状遺構 (第8図、写真図版5)

西側調査区のIV B 5 b グリッドに位置し、北半分は調査区外へと続く。平面形は細長い溝形を呈し、短軸の断面形はU字形である。長軸はN-13'-Wである。規模は開口部径290cm×68cm、底部径290cm×30cm、深さ67cmである。IV層を掘り込んで構築されており、底面には、IV層起源の礫がみられる。埋土は4層に分けられる。出土遺物はない。



第8図 1号土坑・1号陥し穴状遺構

#### 4. 堀跡

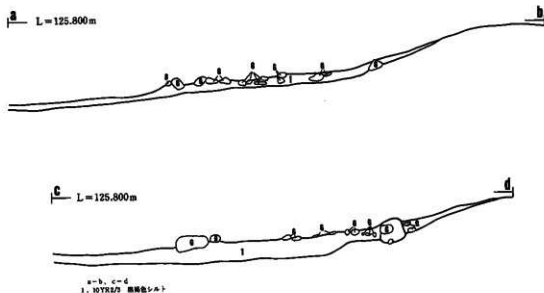
##### 1号堀跡 (第9~13図、写真図版5~7)

西側調査区の中央に位置し、西側調査区の東西を横断して構築されている。西側調査区の北側の調査範囲外には2条の堀跡が認められ、本遺構の北側は郭部にあたるものと思われる。南側の調査区外は土砂削取のため表土が剥ぎ取られており、堀跡が存在したかどうかは不明であるため、本遺構の南側が郭部となるかどうか不明である。また、堀跡の西寄りに土塁を閉塞して段丘の下に続く小径が作られている。堀は地山IV層を掘り込んで構築しており、埋没が比較的軽微であるため、現地地形面からの検出が可能であった。

規模は東西の長さ48mで、堀の両端に構築された土塁間の上幅は9m~10m、土塁の頂部から堀の底部までの深さは最大で1.6mである。

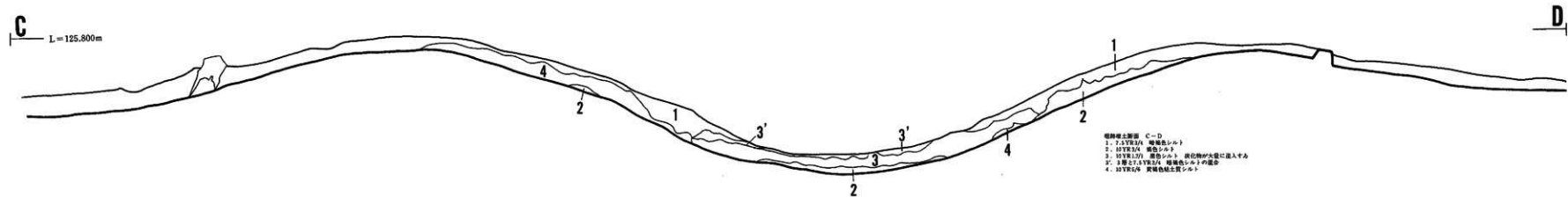
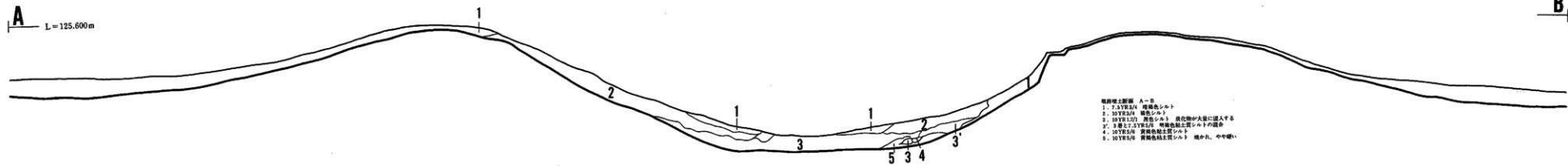
堀の両端の土塁は地山IV層起源の黄褐色土を盛り上げて構築している。土塁の主体をなす黄褐色土は、基本層序III層の上に盛り上げられており、層厚は最大で60cmである。

櫓列、門に類する遺構は認められない。郭にあたると思われる堀跡の北側に面する土塁の北側の堀には堀跡と並行して幅約2mに石を断続的に葺いているが、盛り土の崩落を防ぐためのものと思われる、その性格は不明である。堀の中央のやや西寄りに土橋を構築している。堀の底面からの比高は50cm程度と小さい。堀の構築の際に掘り出したものであろう。

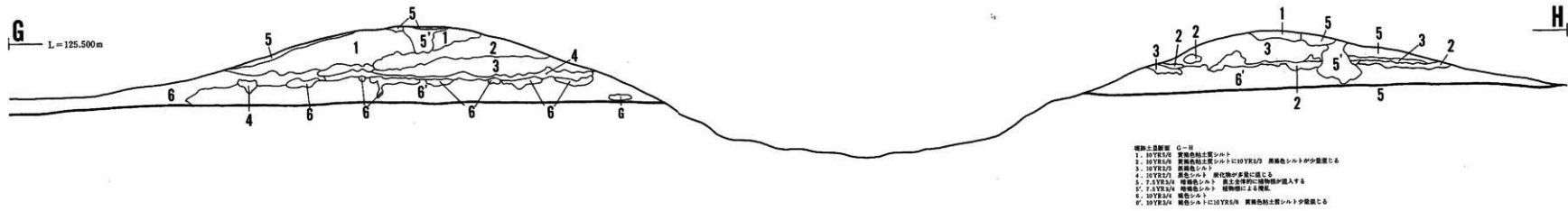
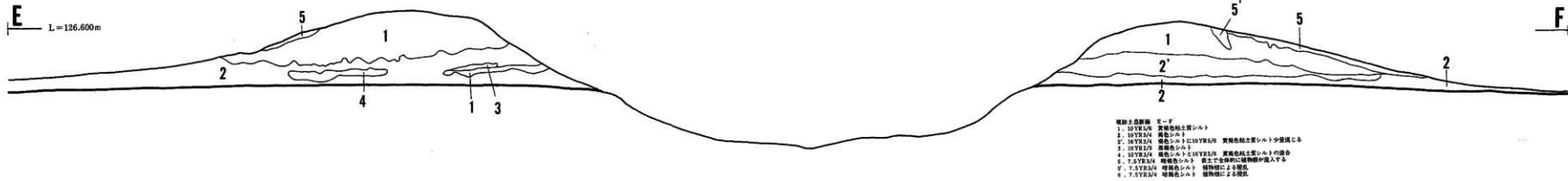


第9図 堀跡葺石断面

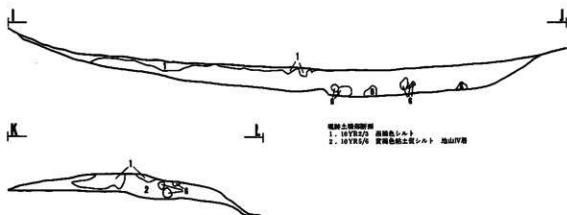




第11図 地層埋土断面



第12図 堀跡土層断面

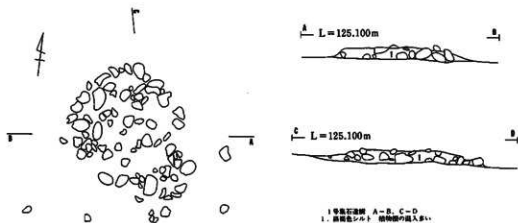


第13図 堀跡土橋断面

## 5. 集石遺構

### 1号集石遺構 (第14図、写真図版8)

西側調査区のVB3 bグリッドに位置し、堀跡の土塁の北にある。多数の礫を積み重ねて構築されている。平面形は楕円形である。規模は径2.3m×1.8m、高さは最大で20cmである。掘り込みはなく、埋土も単層であり、その性格については不明である。



第14図 1号集石遺構

## 6. 炭窯

### 1号炭窯（第15図、写真図版8）

東側調査区のIO4eグリッドに位置する。平面形は開口部、底部とも溝状、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径546cm×115cm、底部径520cm×105cm、深さは最大で50cmである。埋土は5層に細分され、2層からはケヤキの炭化材が出土している。底面には5基の副穴状土坑をともなう。

### 2号炭窯（第15図、写真図版8）

東側調査区のIP3bグリッドに位置し、一端は調査区外へ続く。平面形は開口部、底部とも溝状、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径300cm×115cm、底部径270cm×90cm、深さは最大で40cmである。埋土は2層に分けられ、2層からはナラの炭化材が出土している。底面には2基の副穴状土坑をともなう。

### 3号炭窯（第16図、写真図版8）

東側調査区のII P5aグリッドに位置する。平面形は開口部、底部とも不整形であるが、焼成室の平面形は円形で、壁が底面から直立する円筒形を呈する。東側に焚口、西側に煙出し部を持つ。規模は開口部径430cm×412cm、焼成室の底部202cm×195cm、深さは最大で115cm以上あったものと推定される。埋土は6層に細分され、中位には厚く焼土が形成されており、下部には炭化材が堆積する。底面には多量の礫が見られる。

## 7. 遺構外の出土遺物

本遺跡から出土した遺物はすべて遺構外の出土である。また、出土した地点も東側調査区に集中している。出土量はごく少ない。以下、器種・時代ごとに分類してまとめにかえる。

### (1) 土器

#### ①縄文土器

縄文土器は中期・後期・晩期の3類に大別し、それぞれ順にⅠ～Ⅲ類とした。

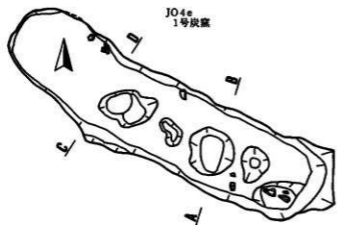
#### Ⅰ類土器（第17図、写真図版9）

1、2の2点が出土している。いずれも深鉢形土器の体部破片である。1は地文の斜縄文の上に綾格文が横走、2は地文の羽状縄文の横を綾格文が縦走する。

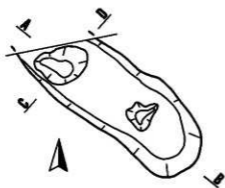
#### Ⅱ類土器（第17図、写真図版9）

3～20の18点が出土している。3は地文の斜縄文の上を沈線と曲線的に区画している。4は

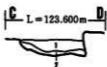




- 1号炭窟 A-B, C-D  
 1. 7.5YR2/1 褐色シルト  
 2. 10YR1.7/1 褐色シルト  
 3. 10YR2/3 黄褐色シルト  
 4. 7.5YR3/2 黄褐色シルト  
 5. 7.5YR4/3 褐色粘土質シルト

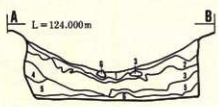
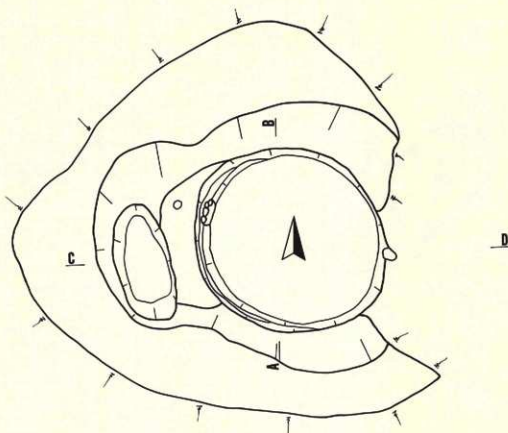


JO4e  
2号炭窟

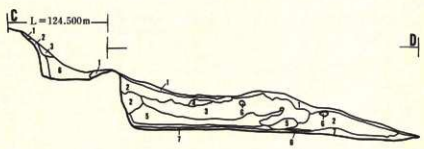


- 2号炭窟 A-B, C-D  
 1. 7.5YR2/1 褐色シルト  
 2. 10YR2/3 黄褐色シルト

第15図 1・2号炭窟



- 3号横屋 A-B, C-D  
 1. 10YR2/2 黄褐色シルト  
 2. 10YR5/0 黄褐色シルト  
 3. 5YR4/8 赤褐色粘土  
 4. 5YR2/2 暗赤褐色粘土  
 5. 10YR5/0 サリアー灰化粘土  
 6. 10YR1.5/1 黒色シルト  
 7. 10YR4/0 黄褐色粘土



第16図 3号炭窯

刺突文から放射状に沈線が刻まれる。5は沈線文の周囲に原体圧痕が見られる。6の口縁は折り返されており、地文はRL単節縄文である。3～6は後期前葉に分類するのが妥当と思われる。7～15は口縁部破片、16、20は底部破片、17～19は体部破片である。無文あるいは地文の斜行縄文のみであるが、胎土から後期に分類した。7、11は地文の斜行縄文のみ、12～14は無文である。8、9は地文が斜行縄文であるが口縁部付近は無文となる。10は口縁が僅かに波状を呈する。16、20は底面に網代痕が見られる。17、18は無文、19は地文のみである。

### Ⅲ類土器（第17、18図、写真図版9、10）

21～25の5点が出土している。21、26は深鉢型土器の口縁部から体部上半にかけての破片である。21は地文の斜行縄文のみ。22は浅鉢型土器の口縁部破片で、口唇と口縁部の4本の平行沈線の中央の2本の間に刻みを持つ。大洞C<sub>1</sub>式に比定される。23は底部破片で、ごく低い台を持つ。24は口縁部に2本の沈線を持ち、口唇部には斜めの刻みが施される。25は壺形土器の体部下半の破片で、体部中央から下半にかけて大きくすばむ。

### ②弥生土器（第18、19、20図、写真図版10、11）

弥生土器をⅣ類とする。26～43の18点が出土している。26～30は弥生前葉、31は弥生中葉、32～43は弥生後葉に分類される。26は壺の肩部、27、28は浅鉢の体部である。26、27は遠賀川系土器と推定される。29は台付き鉢の台部破片で沈線による磨消縄文で区画されている。31は直線的な沈線によって口縁部から体部上半を区画しており、器形は口縁部が括れたのち直線的に外傾する。32～43は撚糸文を地文とする壺形土器の破片で、32～34は口縁部、35～40は体部破片、41～43は底部破片である。35、37は施文方向が交差する。

### ③時期不明の土器（第20図、写真図版11）

無文であり、ごく細片であるため、分類が不可能であるものをⅤ類とする。44～50の7点が出土している。44、48～50は底部破片、47は口縁部破片、45、46は体部破片である。

## （2）石器

### ①石鏃（第20図、写真図版12）

51～55の5点が出土している。いずれも無茎鏃である。53は石鏃に分類しているが、両側からえぐりをいれて基部を作りだしており、石匙に分類するのが妥当かもしれない。

### ②石匙（第20図、写真図版12）

56～60の5点が出土している。56～59は縦形石匙、60は横形石匙である。58は下半が欠損している。

### ③不定形石器（第20～22図、写真図版12～13）

特定の形状を持たないが、剝離調整を加え刃部を作り出しているもの、および剥片、石核を

一括した。剝離調整を加え刃部を作り出しているものには、連続した刃部剝離調整の施されたもの、湾入した形状を意図して調整が施されたもの、刃部剝離調整の粗雑かつ連続性のないものがある。61～78の18点が出土している。

④石斧（第22図、写真図版13）

79、80の2点が出土している。80は破片であるが、磨製石斧の刃部であろう。

⑤砥石（第22図、写真図版13）

81の1点が出土している。表裏両面を使用している。

⑥磨石（第23図、写真図版13）

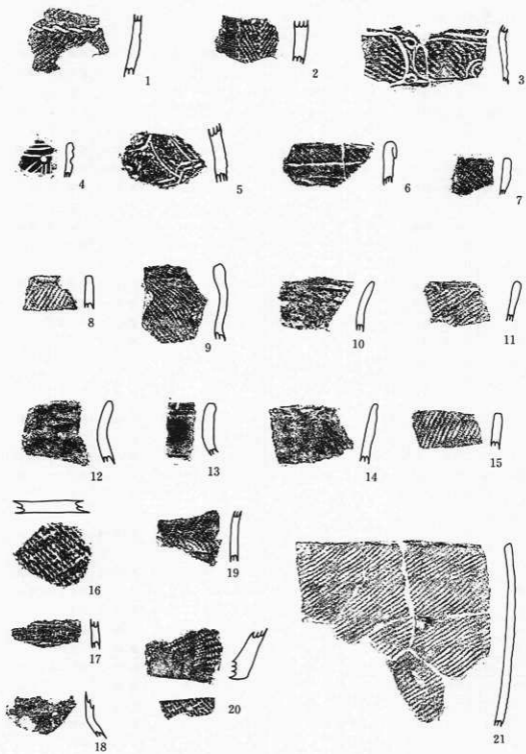
82～86、88の6点が出土している。

⑦石皿（第23図、写真図版13）

87の1点が出土している。

石器観察表

No.	登録番号	遺構・地点・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地	生成年代
51	1	II N 3 d II層下	石鏃	1.8	0.6	0.3	0.4	玉髓	不明	不明
52	4	III O 1 e II層	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.6	珪質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統
53	5	II O 5 e II層	石鏃	1.7	0.9	0.4	0.5	緑色凝灰岩	不明	新第3系中新統
54	31	II P 1 b II層	石鏃	2.2	2.0	0.2	1.5	珪質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統
55	101	IV C 5 b II層	石鏃	2.4	1.7	0.3	1.0	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
56	2	II O 1 e II層	石匙	6.6	4.7	1.1	25.3	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
57	102	VA 2 e II層	石匙	6.8	3.3	0.6	18.8	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
58	103	VC 3 b II層	石匙	2.3	1.9	0.4	2.2	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
59	104	VC 2 c II層	石匙	4.9	3.6	0.8	8.3	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
60	105	IV C 5 d II層	石匙	5.6	7.3	1.3	34.0	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
61	3	II N 4 e II層	不定形	9.9	4.6	1.1	50.3	珪質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統
62	6	II O 表探	不定形	4.1	2.6	1.1	9.8	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
63	7	II N 3 c II層	不定形	6.8	2.4	0.9	9.5	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
64	8	II O 3 d II層下	不定形	5.6	3.2	0.8	9.5	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
65	9	II P 1 d II層	不定形	3.2	1.5	0.8	2.2	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
66	10	II N 3 c II層	不定形	6.1	3.7	1.2	19.5	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
67	12	II N 3 c II層	不定形	4.8	3.6	1.2	15.7	玉髓	不明	不明
68	13	II N 3 d II層上	不定形	4.6	1.9	0.9	9.4	玉髓	不明	不明
69	21	II P 1 b II層	不定形	5.2	8.0	2.5	100	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
70	22	II O 1 e II層	不定形	8.6	5.8	2.3	100	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
71	23	II P 1 a II層	不定形	7.0	7.9	1.4	70.0	珪質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統
72	24	II P 1 d II層	不定形	8.6	5.4	0.7	41.5	粘板岩	北上山地	古生界
73	25	II O 5 e 表探	不定形	4.0	2.7	0.7	1.8	珪質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
74	29	II P 1 b II層	不定形	3.5	5.0	0.6	11.2	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統
75	44	II O 5 e II層	不定形	2.7	1.6	0.4	2.3	玉髓	不明	不明
76	45	IO 5 b II層上	不定形	5.5	5.7	1.8	45.2	玉髓	不明	不明
77	66	II O 5 e II層	不定形	3.7	2.7	0.8	5.4	緑色凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統
78	81	II O 5 e II層	不定形	3.9	2.9	1.0	10.1	玉髓	不明	不明
79	11	II P 5 a I層	石斧	3.5	4.7	1.7	22.8	緑色凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統
80	14	IP 3 c II層下	石斧	18.5	8.3	3.0	500	輝石安山岩	夏油川	新第3系鮮新統
81	75	IP 4 c II層下	砥石	24.2	10.5	10.1	3670	珪質極細粒凝灰岩	奥羽山地	新第3系中新統
82	18	1号土坑	磨石	13.9	7.8	3.8	440	輝石安山岩	夏油川	新第3系中新統
83	20	II P 1 a 攪乱	磨石	8.5	6.9	5.8	460	花崗閃綠岩	夏油川	中生界
84	15	II N 5 d II層上	磨石	9.2	5.8	5.2	300	輝石安山岩	夏油川	新第3系鮮新統
85	16	1号土坑	磨石	11.5	7.0	6.2	620	輝石安山岩	夏油川	新第3系鮮新統
86	17	II O 3 d III層	磨石	10.0	6.4	4.5	420	花崗閃綠岩	夏油川	中生界
87	19	II O 3 d II層下	石皿	8.0	8.0	6.9	440	輝石安山岩	夏油川	新第3系中新統
88	76	II P 4 a II層上	磨石	20.3	19.4	5.7	3740	硬質泥岩	奥羽山地	新第3系中新統



第17図 遺構外出土遺物-1



22



23



24



25



26



27

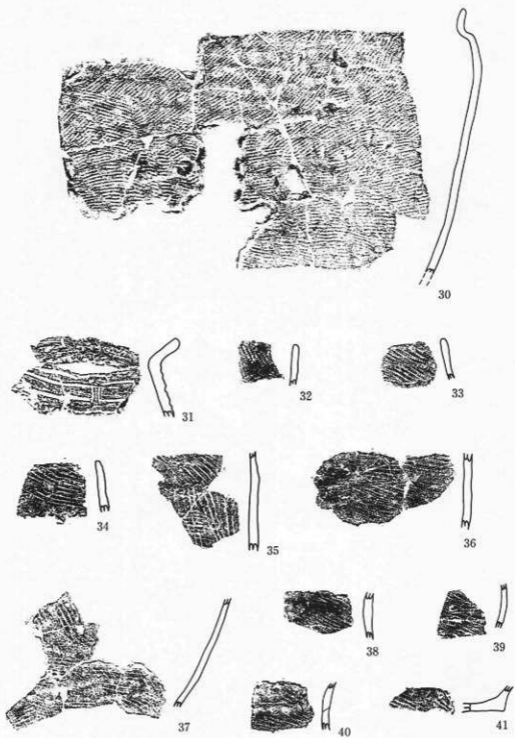


28



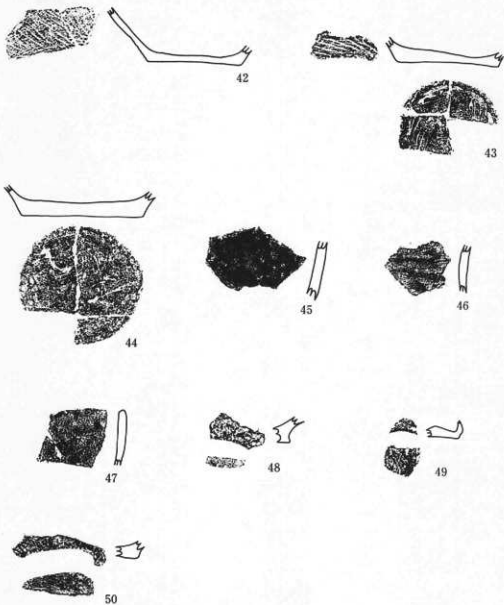
29

第18圖 遺構外出土遺物—2

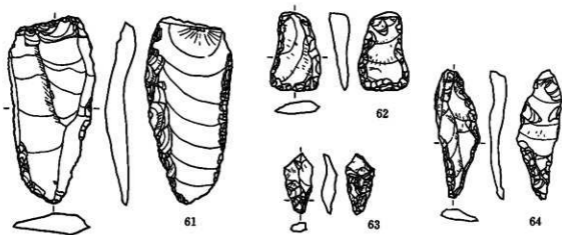
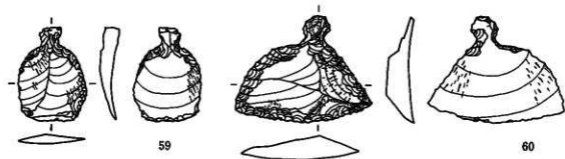
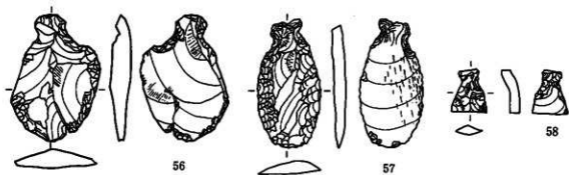


第19圖 遺構外出土遺物—3

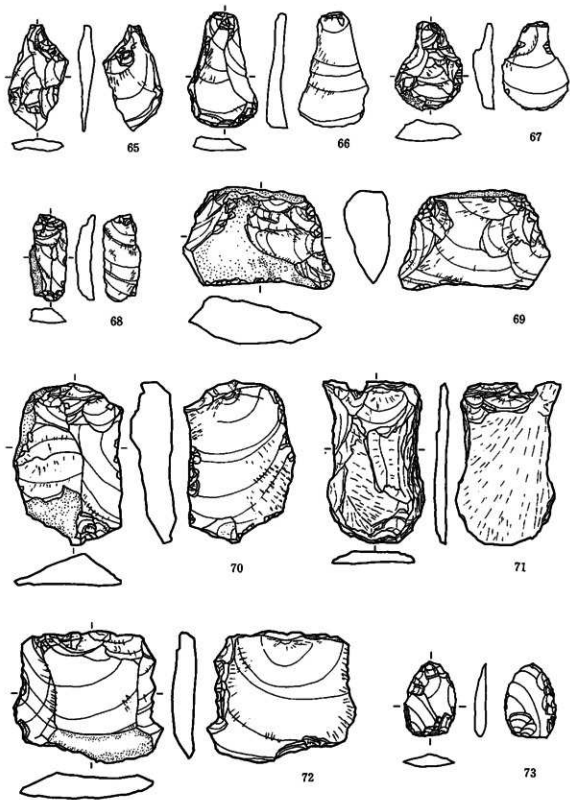




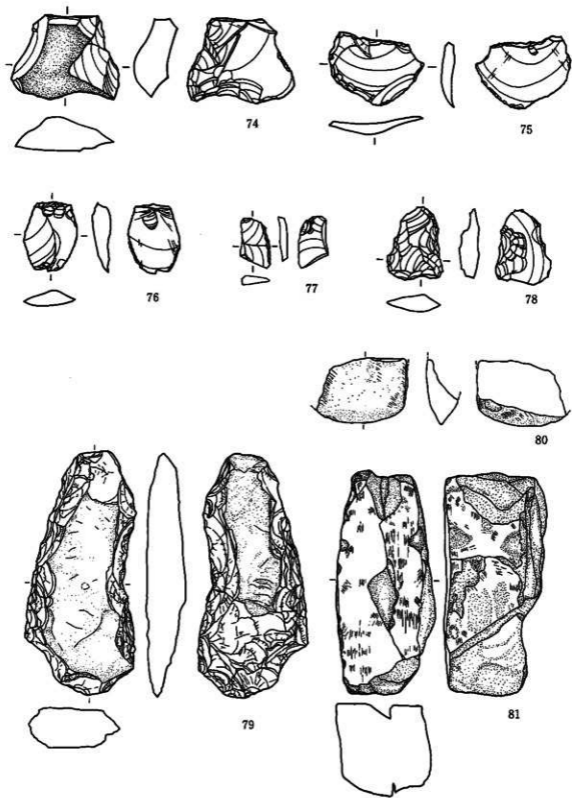
第20圖 遺構外出土遺物—4



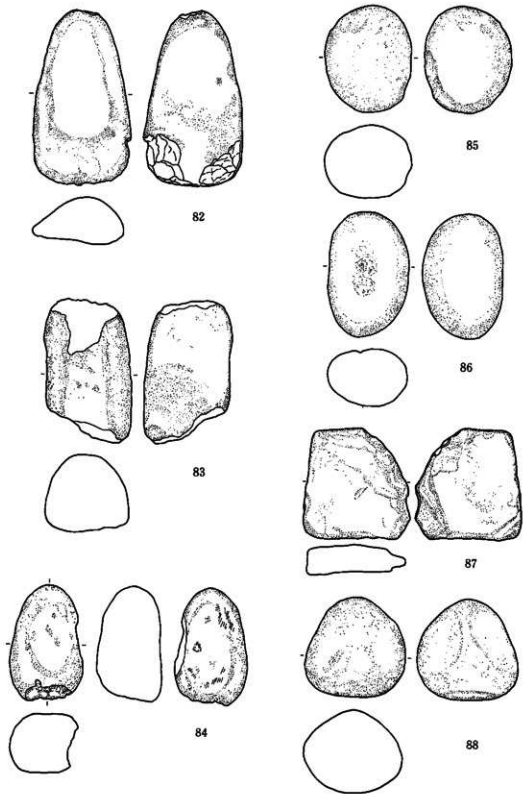
第21圖 遼東外出土遺物—5



第22图 遺構外出土遺物-6



第23圖 遺構外出土遺物—7



第24圖 遺構外出土遺物—8

## V まとめ

検出された遺構は焼土遺構7基、土坑1基、陥し穴状遺構1基、堀跡1条、集石遺構1基、炭窯3基である。すべて遺物を伴わないため、それぞれの遺構の時期を確定することは困難であるが、1号土坑は検出された面から弥生時代に属する土器が出土していることから、弥生時代よりも古いと考えられよう。また、1号陥し穴状遺構は、その規模・形状から縄文時代に属するものと思われる。遺構外の出土遺物はほとんどが東側調査区に集中している。

これらのことから、本遺跡は当該時代には、東側調査区を中心に生活圏の一部として使用されていたものと思われる。

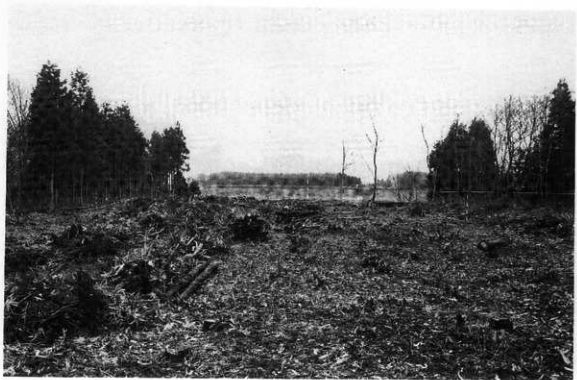
本遺跡で検出された堀跡は西側調査区の中央に位置し、西側調査区の東西を横断して構築されている。西側調査区の北側の調査範囲外には2条の堀跡が認められる。この2条の堀跡と検出された堀跡の間の部分は、標高がほぼ一定な平坦な面であり、郭にあたるものと思われる。調査区の南側は土砂削取のため表土が剥ぎ取られており、堀跡および郭が存在したかは不明である。形状・規模から中世に属するものと考えられるが、昭和57年度から昭和60年度の4年にわたって実施された「岩手県中世城館調査事業」によっても確認されていない上に、地元の通称、小字名にも館跡の存在をうかがわせるものはない。和賀川の沖積面に舌状に張り出した段丘の先端に位置することから、同様の立地条件を持つ本遺跡の東側の兵庫館跡、西側の観音館跡（下須々孫館）と同時期のものであり、これらの中世の館跡と一連のつながりを持つものと考えるのが妥当であろう。

旧和賀郡全域の中世城館は大小150カ所近く存在すると推定されているが、発掘調査されたものはごく少数である。類例の増加をまって今後の検討課題としたい。

写 真 图 版

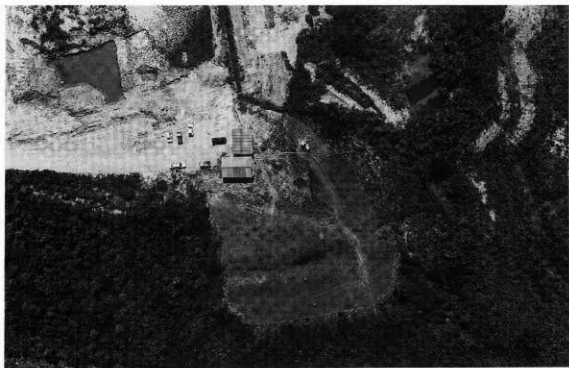


遺跡全景（空中写真）

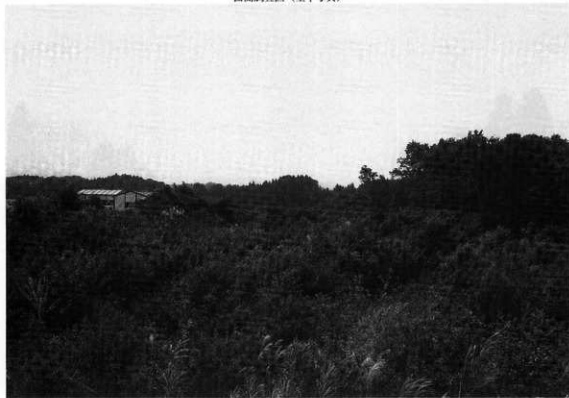


東側調査区  
写真図版1 遺跡全景・東側調査区



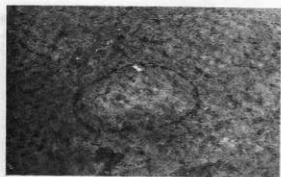


西側調査区 (空中写真)



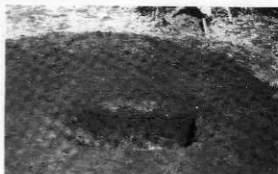
西側調査区遠景

写真図版2 西側調査区

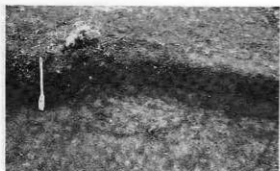


1号烧土遺構

検出



断面

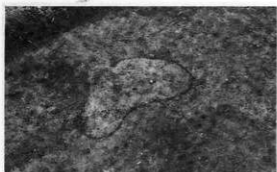


2号烧土遺構

検出

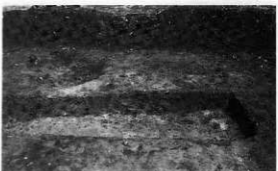


断面

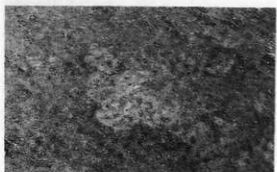


3号烧土遺構

検出



断面



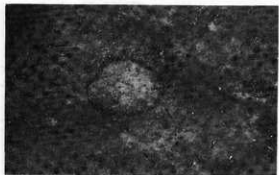
4号烧土遺構

検出



断面

写真図版3 1・2・3・4号烧土遺構



5号烧土遗構

検出



断面



6号烧土遗構

検出

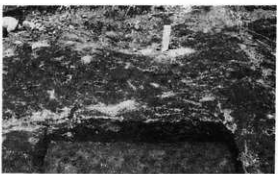


断面



7号烧土遗構

検出



断面



8号烧土遗構

検出



断面

写真図版4 5・6・7号烧土遗構、1号土坑



1号陥し穴状遺構 完観

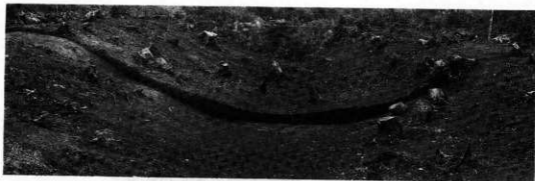


断面



掘跡 検出状況

写真図版5 1号陥し穴状遺構 掘跡(1)



埋土断面 1



埋土断面 2



完 畢

写真図版 6 掘 跡 (2)



土墓断面 1



土墓断面 2



土墓断面 3



土墓断面 4



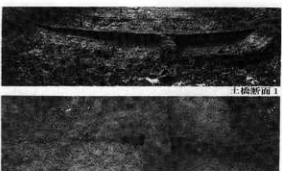
土墓葬石 1



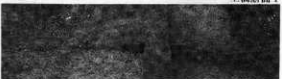
土墓葬石 2



土橋部



土橋断面 1



土橋断面 2

写真図版 7 掘 跡 (3)



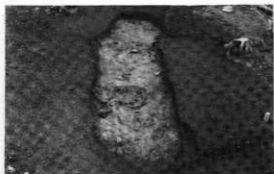
1号集石遺構 検出



断面 2



断面



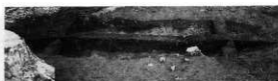
1号炭窯 完掘



断面



2号炭窯 完掘



断面 1



断面 2



3号炭窯 完掘

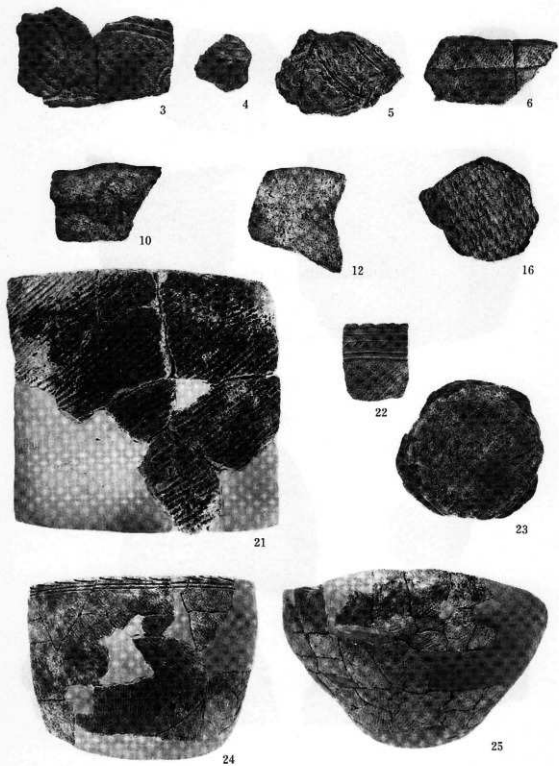


断面 1



断面 2

写真図版 8 集石遺構 1・2・3号炭窯



写真図版9 遺構外出土遺物-1





26



27



28



29



30



31



34



35



37



38



39



40



41

写真図版10 遺構外出土遺物-2



42



43



44



45



46



47



48

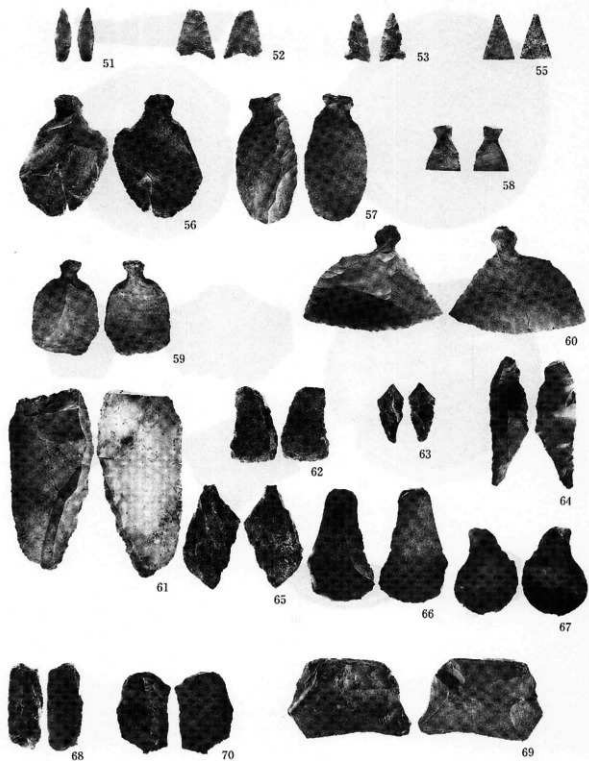


49



50

写真図版11 遺構外出土遺物-3



写真図版12 遺構外出土遺物—4



写真図版13 遺構外出土遺物-5



---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第181集

上反町遺跡発掘調査報告書

印刷 平成4年10月23日

発行 平成4年10月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020 岩手県盛岡市下飯岡11字高屋敷185番地  
TEL (0196) 38-9001

印刷 株式会社 吉田印刷  
〒020 岩手県盛岡市名須川町23-27  
TEL (0196) 25-2323

---

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992